

Ethnic Plants of Oze -多民族な植物たち-

公益財団法人 尾瀬保護財団

尾瀬には、長い長い地球の歴史の中で、日本だけに居着いた植物（日本固有種）のほかに、寒い氷期に大陸から日本に入って来てそのまま残っている植物など、様々なルーツをもつ植物グループが存在しています。この発表ではそのありさまを“多民族な植物たち（Ethnic Plants）”と表現しています。みなさまに尾瀬や日本の自然を一段深く感じていただければ幸いです。キンコウカやニッコウキスゲなど、尾瀬でおなじみの植物を見る目がすこし変わるかもしれません。

尾瀬は上毛かるたに「仙境尾瀬沼花の原」と詠まれています。このように、いろいろな花が咲いている（生物多様性が高い）という状態が成り立っている背景には、過去の気候変動などを経て、植物たちが北へ南へゆり動かされた結果、様々な由来をもつ植物の集団が尾瀬にまとまって残っているということがあります。大まかには以下の2つの構成要素からなります。

①日本の固有種

現在日本にしか生えていない植物で、日本に土着した年代が古いものが多い

②北方および東北アジア大陸との共通種

過去の氷河期に日本に定着し、現在も生育しているもの

さらにそれぞれがまたいくつかの要素に細分化されます。たとえば、日本固有種ではシラネアオイのように日本海側のみに分布しているものや、オゼコウホネのように非常に分布が限定されているものがあります。北方および東北アジア大陸との共通種では、ミツガシワのように千島列島やカムチャッカ半島方面と共通するものや、リュウキンカのように朝鮮半島・中国東北部と共通するものなどがあり、それぞれ違った由来をもっています。尾瀬の植物といえば、ミズバショウ、ニッコウキスゲが有名ですが、この2種は②北方および東北アジア大陸との共通種に含まれます。逆に尾瀬の至仏山に生えるオゼソウは非常に分布が限定されている種類です。

つまり尾瀬の生物多様性の高さは、過去の気候変動と地形の変動による曲折の結果、現在中部日本に定着している様々な由来をもつ植物たちがほぼ勢揃いしている、ということによって説明できます。

個々の種類の分布範囲をみると、想像の幅がとても広がるのではないでしょう。また新たな気づきも生まれます。

さらに、地球の環境は絶えず変動してきていること、その履歴が自然の景観、種類構成の中に記されていることもおわかりいただけると思います。私たち人間の繁栄はおおきな地球のゆらぎの中のつかの間の数千年間というテラスの上に立っています。いろいろと考えてみてください。

この発表は、平成27年度尾瀬沼ビジターセンターにおいて行った企画展示の紹介となります。

キーワード：植物地理、気候変動、固有種、共通種、生物多様性

生物多様な日本

植物種数 (コケ植物を除く)

日本 約5700種

加藤・海老原(2011)より

ドイツ 約2600種

※面積が日本とほぼ等しい

首相官邸web ページより

<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kankyo/kettei/pdf/1-2-2.pdf>

日本の多様性 (植物相) の構造

